

会報四月号 仁義

目次

- ・ 仁義と思いやりと責任感
- ・ 己を全うする自分なりの方法論を持つ
- ・ まとめ

新年度が始まった。世の中は新型コロナウイルスとの戦いで社会活動は委縮し、窮屈なスタートとなった。新型コロナの影響は大きく、東京オリンピック、パラリンピックをはじめ、多くの人が集まる様々な社会的・経済的・精神的組織の活動は延期や中止を余儀なくされている。五年程度の中期戦略を以て、この時期もこれからの反動の揺り返しの時機も乗り切っていきたい。

● 仁義

地球上のどこであっても、人が人に出会ったときの根本のルールがある。それは、お互いを思いやること。それが仁である。その次は、皆で協力一致しながら各自が役割を果たしていくこと（責任感）。それが「義」である。この、思いやりと責任感というものは、古今東西、世界のどこにいても、どの業界にいても、人間として認められる普遍的な基本である。人に温かく接するという優しさ・思いやりと、自分に与えられた役割を全うする強さ・責任感。つまり、仁義である。

国単位で世界を見渡してみても然り。金や軍事力や技術力を持っているのは大きな力だが、それだけで他国から認められ信頼されているかといえば、それは少し違う。相手国への思いやり（仁・優しさ）と、自らの国の役割を全うする責任感（義・強さ）が足りなければ、便利で役立ちはあるが、なかなか認められたり信頼されたりするものではない。

「仁」とは本来、生成化育へ向かうプロセスである。それは、物事を受け入れ、包容し、そのものの個性を認め、許し、繋がり一体となって新たな変化を起こしていく、その一連の流れ全てを含む概念である。そこには、大きく、温かく、明るく、深い感じがある。自分を思いやり、許すこと。他者を思いやり、許すこと。未熟だから自分を褒めて認めてやることも必要だ。このような仁の意味を「思いやり」「優しい」「温かく接する」等の言葉で歴史は伝えてきた。

また、「義」とは本来、「正しいと己が信じることを為すこと」である。「責任感」であり「実行力」であり「強さ」である。その「正」とは「一」に「止」とどまる」ことであり、「一」とは比較対象のある相対ではなく、比較のない絶対を表す。儒教における絶対とは、道理（万物を生成化育していく自然の摂理）である。道理に基づき、己の成すべきことを為す。自分で選択し決断する。決断したら、そこに己を尽くしていく。己の使命、志、与えられた役割を全うしていく。

義という強さは、誰かと喧嘩して勝った負けたという強さではない。自分の役割や責任を果たしていく全ての力のことである。

つまり、仁義とは全てを包容し、受け止め、認め、許し、己の成すべきを為していくことである。どんな自分であっても、どんな境遇であっても、それを受け止めたとき、それが新たな力となって己の成すべき（義）を為す決意へと向かう。このような人間存在の在り方を真善美と言い、仁義の人と言う。

ここでもう一度、「男」という漢字の意味を確認しておきたい。男という字にある「田」の外側の「口」、これは、荒野の一区画を示す。つまり、この区画を開墾しようという強い志（目標）である。「口」の中の「十」は畦道（あぜみち）。つまり、まず道を付けるのである。そして、その道に沿って「力」を尽くして己の志を果たしていく。これが男であり、逆から言えば、志（目標）もなく、道筋を付けること（計画）もできず、途中で挫折するような者は男でもなんでもない。そして、現実には支え合う仲間や家族が必要になる。

男にとっては愛も仁義である。愛とは、相手への思いやりであり、相手への責任感である。

### ●己を全うする自分なりの方法論を持つ

有限の時間の中で己の仁義を全うする為には、達成していくための「自分なりの方法論（道筋）」が必要である。何処へ向かうにしても道と通るから、もし方法（道筋）がなければ、ゴールへ辿り着くかどうかは運任せになる。また、「自分なりの」とオリジナルを求める意義は、方法論にも基本はあるとしても、人の個性や能力はそれぞれ違うから、だれかが上手くやったそのやり方が自分に当てはまるかどうか分からないからだ。

人の性格は、例えば前向き、外向性（人付き合い）、開放性（興味・関心・好奇心）等におけるエネルギーの大小によって、ひとりひとり違う。だから、「自分を知る」ということは非常に大切なことである。

では、そもそも人の性格はどうやって決まるのか。遺伝の要素が三割から五割で、残りの五割から七割は環境が影響すると言われる。但し、環境の影響はそう簡単では

ない。同じ環境なら、そこにいる人たちは皆性格が似てくるのだろうか。答えは否。環境は人を似せる方向ではなく、寧ろ人を似せない方向に働くと言われている。同じ環境下でも、ある人はネガティブになり、ある人はポジティブになる。結局、いろんな環境に接しないと、その人の性格がどうなっていくのかはわからない。

また、そもそも性格の違いというものは、価値判断の対象とするには相応しくない。優劣ではなく、ただの違いなのだ。だから、ポジティブがネガティブより良いというわけではない。性格に優劣があるのではなく、その性格を活かす環境かどうか、環境とのマッチングがより大切である。

己の人生の責任は自分にあるのだから、「己(自分の命・性・道)を知る」こと、そして、私たちは自然の摂理や社会の中で生きていくのだから、その摂理や道理を会得することはとても重要である。

方法論の一つは、己を知って、道理に沿った「自分の必勝パターン」という公式を作り、その公式に乗ることである。やる気のない時でも確実に前進するためには、やる気がない時でも努力を続けられる戦略を立てることである。それは、環境を作り、予定(スケジュール)を組み、責任を明確にして、やる気がない自分を支えるようにすることだ。

①ゴールの設定(目標と期限)、②現状把握(己を知る、敵を知る)、③計画を立てる(戦略・戦術、課題の克服案、スケジュール)、これらを書き出して④環境に留意して実行していくのが基本である。

もちろん、最後の最後は本人の意志の強さなのだが、己の意志だけに頼ったり、計画を立てないという戦略(行き当たりばったり)はお勧めできない。そこに待っているのは、望んでいない報いを受けるという自業自得の結果であることがほとんどだ。なぜなら、大多数の人にとって、意思の強さを持続させることは非常に困難であるから意志の力だけに頼ってはいけないし、また人生は誘惑と挫折の機会に満ちているから無計画(無戦略)では、自分の位置が分からなくなるからである。

目的を果たし己を全うするために計画を立てて、最大の資産である自分と時間を管理して、己の成すべきを為し、手に入れるべきを手に入れていくのである。

では、意志はどう使うか？

自分を客観視するために使う。目標達成への道筋を外しそうになった時、それを微調整するために使うのである。自らを省みて、浮かれたり、油断したり、臆病になったり、怠惰無気力になったりする自分を受け止め、反省して自分を歩むべき道に戻す。そのために使うのである。

あくまでも主動力は、環境や計画の道筋という流れと勢いである。意志は道筋からのズレを調整したり進退を判断するための補助動力やバランスサーとして使うのである。調整したりバランスをとったりするには軸が必要である。その軸は仁義である。

●まとめ

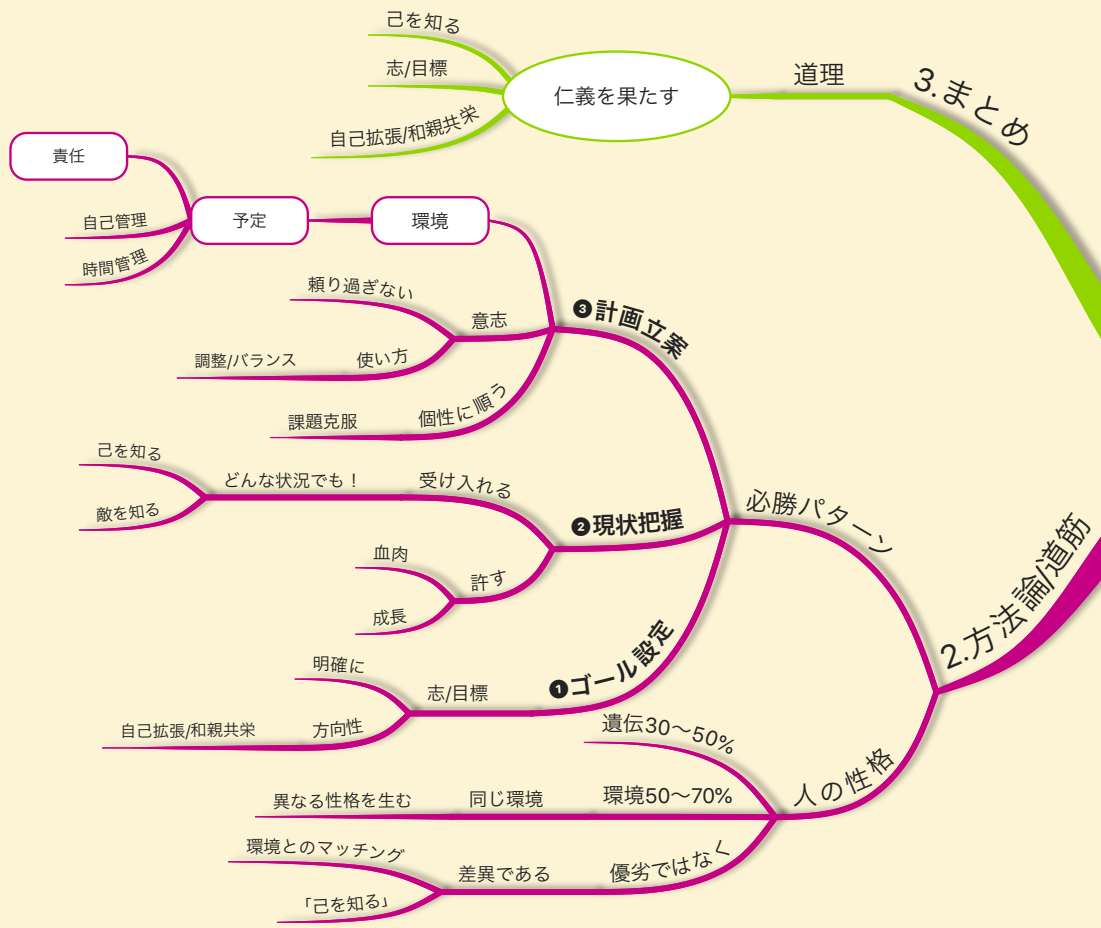
何時の時代にも、男にとって大切なのは己の仁義を果たすことである。自分の居場所を間違えてはいけない。道理を知り、己を知り、居場所（環境）を定めて、自分の戦略を以て己の道を歩く。それが自己の実現・和親共栄への道である。

「道理↓仁義↓己を知る↓志・目標↓自己の実現・自他の共栄」この精神的な背骨の流れを養って、己の命を全うしていきたい。

今月も健康と健闘を。

コメディアンの志村けん（七十歳）さんが、新型コロナウイルスによる肺炎で、三月二十九日に亡くなりました。ドリフターズ時代の体を張った笑いとアドリブが大好きでした。笑いに乗せて彼は彼の仁義を全うし、皆を元気にさせてくれました。私も当時とても笑顔にさせてもらいました。ありがとうございます。

心からご冥福をお祈り申し上げます。



会報4月号  
「仁義」

